

事例10 障害児学級に入級して、不登校傾向を克服したJ男(中学3年生)

欠席等の様子

- 中1 2学期まで 18日
(前籍校11日(転入11月))
3学期 5日(遅刻3早退1)
学級に入れず、2月中旬から相談室に登校した。】
- 中2 1学期 4日
【5月障害児学級(以下障級)の見学を始めた。】
2学期 2日
【10月障級に入級した。】
- 中3 1・2学期 0日

学習の様子

- 〔数学〕九九は覚えており、かけ算・割り算はできるが、文章題の場面理解が難しい。時間の計算、小数の割り算、図形の理解も苦手である。
- 〔国語〕音読では勝手な読替えがある。読解も他生徒の反応を見ながらそれなりに答える。作文での脱字、長音促音の誤表記が多い。漢字は、小2～3年程度である。
- 〔その他〕記憶の定着が弱い。

性格や行動の様子・エピソードなど

身辺自立はできている。

幼稚園と小学校で発達検査を受け、軽度の知的障害を指摘されたが、保護者は認めたくなかった。小学校卒業まで通常の学級に在籍したが、いじめも受けた。

(中1)被害者的な意識が強い反面、承認欲求も高く、攻撃的言動もあった。

(中2)コンプレックスのため自己を粉飾するうそやごまかしも多い。

友達と遊べず、家庭ではテレビ、ゲーム漬けの生活である。

生徒の理解

幼児期から発達の遅れを指摘され、検査を受けても、保護者の障害受容が、教育の場についての適切な選択ができる段階までには至らなかった。そのため、学習困難が積み重なり、思春期を迎えて、他生徒との差やコンプレックスの自覚が強まり、登校しぶりにつながった。

周囲への適応がより必要とされる転校が、登校しぶりをさらに強めた。小さなトラブルでも学校に不信感をもつ被害者的な意識や、プライド維持のための強がりやうそもある。

援助・指導の方針

- 1 被害者的な意識に配慮した、相談室登校を行う。
(不登校傾向を改善するため、登校環境に配慮する。)
- 2 障級への入級を見据えた相談室での個別指導を行う。
(入級を拒否しているプライドに配慮し、個別指導の中でつまずきの自己理解を図り、納得の上で発達検査を実施する。)
- 3 定期的な母親面談及びトラブル時のきめ細かな連絡を行う。
(J男の障害を受容し、適切な援助の場についての理解を図る。)

援助・指導例と経過 ----- 主な担当者 教育相談部、障級担任 -----

相談室登校へ 中1 3学期 2月中旬	<ul style="list-style-type: none"> ・遅刻や早退が続き、ついに教室に入れなくなった。教育相談部員が、相談室への来室を勧めた。 ・相談室登校を開始した。その一週間後、母親面談も実施した。 国語・数学 小1程度の内容にもつまずく。 運動・動作面 比較的能力があり、卓球は楽しんだ。 トランプ遊び ルールや残り札の理解を援助すれば、周囲を気にしながらも楽しめる。同室の2年女子ともうち解けられた。
入級への取組 中2 1学期	<ul style="list-style-type: none"> ・定期家庭訪問 父親が家庭学習の面倒を見始め、「J男の学習困難の厳しさに驚き、LDを疑う。 ・保護者の了解を得て、スクールカウンセラーが発達検査を実施した。 ・父親の「無理なく入級させてください」との言葉を受けて、入級の方向を校内組織で確認した。
5月	<ul style="list-style-type: none"> ・障級の数学授業を見学し、参加する。 ・入級することへの不安のためか、登校しぶりが見られた。無理をさせないように配慮し、授業に数回参加させる。
6月	<ul style="list-style-type: none"> ・その後、「数学の授業が楽しい」の感想をもつ。 ・数学だけ障級で授業を受けることを開始した。
同月下旬	<ul style="list-style-type: none"> ・ほぼ全授業を障級で受ける。
7月	<ul style="list-style-type: none"> ・全日(朝学活から終学活まで)障級で過ごす。この間障級の地域行事にも参加した。
入級 中2 9月	<ul style="list-style-type: none"> ・両親が授業を参観する。母親:「こんな生き生きしている」J男は初めて見た。世間体より子どものことを考えないと・・・」一週間後に入級した。

変化と課題

1 変化

対人関係 障級の温かい人間関係の中で、徐々に人との付き合い方を学び、攻撃的な言動が減って、前向きで素直な面を取り戻しつつある。

学習 分からない時のごまかしや知ってるふりが減り、積極的な姿勢が見られ、国語では小4の漢字、数学では多位数のかけ算・割り算、小数、分数の理解も進んでいる。

家庭 母親は世間体を気にすることもあるが、「J男の成長を見て多面的な見方ができるようになった。

2 課題

学習 記憶したことの定着や、抽象的な概念の理解に弱さがある。

考察

障級入級を見通し、別室登校指導など教育相談の機能を生かしながら、教育相談部と入級にかかわる組織との連携が行われている。軽度の知的障害に起因する学習困難と、対人関係でのつまずきへの援助を、スモールステップで積み上げ登校しぶりの改善につなげた事例である。

J男は今

3年生になり、養護学校高等部への進学に向けて登校も安定し、学習に取り組んでいる。学級のリーダー的存在である。